
遊戯王GX～お気楽極楽食欲な学園生活～

時金 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX〜お気楽極楽食欲な学園生活〜

【Nコード】

N1013Z

【作者名】

時金 成

【あらすじ】

俺は死んだ。けれど俺の死は神とやらの部下がミスをしたらしい。

そんな説明をされて、来世に特典付きで転生されるときた。いや、正確には願いをいくつか叶えてくれると。

俺は今では唯一の家族だった妹2人の幸せを願い、来世に役立つ道具を俺の所持品の中から送ってくれと頼んで転生した。

そして、転生した先の世界は……あの有名なカードゲームの原点《遊戯王》の世界だった。原作知識なんてほとんど役に立たない俺の第2の人生……どうなっていくのやら。

↑注意↑（前書き）

読む上での注意事項です。私のもう一つの作品【お気楽小僧】とは違いますので注意です。

何か増やした方がいいと思った方は知らせてください。

ちなみに、オリカとオリキャラは募集してはおりません。

＋注意＋

【シンクロ・エクシーズについて】

『お気楽小僧』と違いこちらはオリ主も使用します。ただし、頻度はそれほど高くはありません。

【時代に合わないカードについて】

基本的にはシンクロ関連とエクシーズ関連は存在しない設定です。

シンクロ・エクシーズ・チューナーとテキストに表記されているカードと、極星・ジャンク・BF・TGなどシンクロに強く関連するカードも同じく。

それ以外の最新のカードは大半が存在している設定です。

【『お気楽小僧』との違い】

「01-TURN」を読めば分かる通り最大の違いがTS転生と名前が変わった事です。

それと、性別から所属する寮も違います。他にも多々ありますが、オリ主に関しては追々作中で。

〇〇-TURN【いいはどう？ 俺は……】（前書き）

【遊戯王GXーお気楽小僧の決闘者生活Ⅱ】の原型です。

お気楽小僧の方がやや詰まってるので気分転換と繋ぎのためにこちらも投稿します。その際に色々設定を追加・変更してお気楽小僧とはまた別の物語として進める予定です。

簡単な差違などは注意事項に書いてあります。

00-TURN【いいはどい？ 俺は……】

んん？ ここはどこだ？ 辺り一帯真っ白な目に痛い空間に俺は浮かんできていた。確か俺は三十路の誕生日で仕事をクビになって居酒屋でちびちび飲んでたはずなんだけど……。

「これ、お主が高峰勝利で相違ないな」

へ？ 名前を呼ばれ振り向いた先には周りの白よりも尚透き通った圧倒的なまでの純白の塊が存在していた。え、なにこれ？

「すまぬの。わしの姿はお主のような存在には、ちと荷が重いでの。光の塊にしか見えぬはずじゃが許しておくれ」

えゝ、どなた……人？

「ふむ。お主らの言葉で表せば神が一番近いかも知れぬの。わしらは自らの事を統括せし者と呼んでおる^{ミナリオン}」

み、ミーナリオン？ 種族の名前か何かですか？

「そう取ってもらって構わんよ。さて、わしがお主の前に姿を見せたワケを話そうかの」

あれ、なんか通じてる。というよりも喋れない？

「言いたい事は思い浮かべるだけで構わん。お主は今肉体がないのでな。不便じゃろうが今は我慢して欲しい。さて、お主が肉体を失った理由じゃが……端的にすればわしの部下がミスをしたとしか言えんのじゃ。部下に代わり謝罪する」

ミス、ですか？ 具体的には……。

「お主の隣に年配の男性が座ったじゃろ？ 彼の者の名は高松勝利というのじゃ。ここまで話せばだいたい想像できるはずじゃ」

名前が似てたから間違ってしまったと？

「うむ。お主は急性アルコール中毒と言う症状で病院に運ばれるが、死ぬほどではなかった。しかし、部下が勘違いしてな。心臓麻痺で亡くなるはずだった隣の老人ではなく、お主の肉体から魂を抜いてしもうたんじゃ」

あゝ、俺だと勘違いしたわけですね。ちょうどよく死にかけたから。

「その通りじゃ。本来ならお主は後70年ばかり生きるはずじゃったんだがの。お主の肉体はすでに燃やされてしもうて生き返らせる事が不可能にな」

俺がこんなになっちゃった原因はわかりましたが、なんで説明されてるんでしょう？

「それはの。わしらにも守らねばならぬ規則がある。すでに決めら

れた命運から外れる行いはあってはならぬのじゃ。その者達には一人の例外もなく、いくつかの希望を聞き別の世界で新たな肉体を与える決まりになつとる」

つまり転生？

「その通り。では、本題じゃ。お主、新たな世界では何を望む？」

あゝ、別に普通で。他の魂と同じでお願いします。

「ふむ。何もないのかね？ お主のいた世界にも干渉できるが……」

あ、なら遣してきた妹2人に幸せに暮らせるだけの加護って大丈夫ですか？

「それくらいならば容易い。他にお主個人の願いはないのかの？」

俺個人ですか？　いくら食べても太らない体質とか、甘いものは常に別腹とか、ニキビとかおでき？　それが絶対にできないとか。あゝ、あとはバク転とかできたらいいですね。

「ふむ。今までの者達と比べると控えめよな」

そうなんですか？　参考までに聞いても？

「無限の魔力やありとあらゆる魔剣、聖剣を欲した者もおったな。じゃが、そのどちらも理を侵し無に還ってしもうたがの」

えっと、理ってなんででしょうか？　破らないために聞きたいのですが。

「簡単な事じゃ。新たな肉体を得た世界で故意に殺生をしてはいかん。ただ、それだけじゃ。生きるために動植物を食らうのは仕方ない。じゃが、そうでなく故意に命を奪えば主の存在で贖わなければならない」

あの、自転車をこいでる時にアリを踏んだりとか、籠にトンボがぶつかって死んじゃった場合は……。

「故意でなければ大丈夫じゃ。だが、故意であるならばその瞬間にお主は無に還ることになるじゃろう」

それだけは絶対に忘れないようにしてください。

「うむ。して、他にあるのなら遠慮せず言いなさい」

あ、じゃあ。転生する先の世界で役に立ちそうな物を前世から持ってきて欲しいです。何が役に立つのか分からないのでお任せします。

「その程度ならよかろう。まだあるかね？」

いえ、それだけで構いません。

「そうか。ならばしばし眠りなさい。次に目覚める時にはすべて終わっている」

はい、よろしくお願いします。

「老骨の最後の仕事じゃて。久々に全身全霊を傾けてみようかの」

そんな呟きを聞きながら俺の意識は真っ白な空間に溶けていった。

01-TURN【俺がぼくになった理由（わけ）】（前書き）

プロローグその2です。十デュエルがあります。

01-TURN【俺がぼくになった理由（わけ）】

あの不思議な空間でミーナリオンという種族のお爺さん……口調から多分だけど、お爺さんと別れてから俺は俺であることを自覚した。

あれは夢じゃなかったのだと幼児には似合わずに遠い目をしたものだ。それからは色々と心の整理と破ったらいけない理に注意する日々だった。その日々の中で思ったのは幼稚園児というのは中々に残酷だということだ。バッタを捕まえた男の子が他の男の子と取り合いをしたと思えば、その……バッタが胴体から真つ二つとか。

動かなくなったバッタに興味をなくしたのかあっさりと捨てるのを見たときは顔が引きつったのをよく覚えている。ちなみにバッタにはちゃんとお墓を作ってあげましたともさ。

それから俺は小学校に上がり自称をぼくに変えた。自称を変えた理由は大した意味はないが、それは後に語るとしよう。この頃からこの世界がどんなものか知った。

K・C・社やI2社という言葉に聞き覚えがあったのだから。そう、ここは遊戯王の世界だ。いつの時代かは詳しくはわからないが、お……ぼくの年齢からしたら初代には関われないのは明白だった。

それとこの頃からだ。親父と母さんの仕事が忙しくなったのは。両親は会社内恋愛で結婚した今も同じ会社で働いている。家庭では会社に関する事は一切話さない両親で、中学校に上がった時に出た親の仕事に関する作文を出された時に初めて知った。

両親が勤めていたのはI2社の広報課だった。新しいカード、パツクの宣伝やK・C・社と合同のイベントの告知などを担当している。そんな両親を持つのがデュエルアカデミア中等部に入学したのも何かの縁なんだろう。中等部とは言っても寮があるのはさすがはK・C・社主導の学校だ。

2年に上がる頃に両親はI2本社での仕事のために海外に転勤した。会長のペガサスさんのご厚意に両親揃っての転勤で、ぼくも一緒にどうかと誘われたが中等部でできた友達とは別れづらく、どっちみちデュエルアカデミア本校に進学する予定だから日本にいる方が都合がいいので丁重に断った。

その時に親父からとあるカード……世界に1枚しかないとんでもないレアカードをもらったが、それがどんなカードかは後々の楽しみに取っておこうと思う。そうそう。両親が転勤して少し経った頃に“ミール・リオン”という差出人で小包が届いた。開けてみれば小型端末とポーチ……それと手紙だ。手紙には今ではもう忘れかけていたミーナリオンのお爺さんからだった。

この世界では遊戯王カードが重要な役割を持つ。だから前世でぼくが持っていたすべてのカードをポーチの中に入れて送ってくれたら

しい。ぼくが前世で持っていたカードは片手だけで持てるようなポーチに入りきる程度の量じゃなかったからすべてという言葉に首を傾げた。

よく読めばまだ続きがあったため、読んでみればポーチと小型端末についての仕様書だった。ポーチの中は異次元空間に繋がっており、ぼく以外からは単なる小さなポーチだが。付属の小型端末を操作する事で欲しいカードをポーチから取り出せるらしい。

しかも、小型端末にはデッキリレシピを登録する事ができ、簡単な操作だけであつという間に作成する事ができるらしい。一々1枚1枚効果を見て作らずに、ゲームであるような検索機能で一気に欲しいカードを探せる助かる機能付きだ。

至れり尽くせりである。しかも、軽く小型端末を操作してみれば甲虫装機まで有った。所持枚数は……あれ、分からない？ 枚数が表示されないって事は全部1枚ずつなのか……そう考えながらカード1枚選んでデックススペースに移動させてみたら。

減って消えるはずのカードは消えなかった。もう一度移動させても、3枚目でも。4枚目と行きたかったが3枚以上は入れれないと出て操作はキャンセルされた。うん、これカード無限だわ。

あとゲームオリジナルでしか見たことがなかったカードもあるし、多分遊戯王のゲームで手に入れたカードも入っているのだろう。検

索機能やデッキ登録もゲーム由来に違いない。ただ違うのは1枚単位で取り出せるのと、登録さえしていれば複数のデッキを取り出せること。

なんだろう……この世界で凄まじく高価なカードもあるし、売って金を稼げることだろうか？ まあ、さすがに青眼の白龍は出せないな、ぼくの命が危うい。それにそうポンポンとレアカードを売ったりしたらいらぬ危険を呼び寄せそうな感じがするから、親しい友人の誕生日とかに贈る程度に抑えた方が無難かもしれない。

使わないカードに関してはおいおい決めるとしてぼくは今使っているデッキを強化する事にした。ぼくが今使っているデッキは闇属性の岩石と悪魔の混合デッキだ。この世界にストラクチャーなんて便利なものはなく、デッキはパックから出たカードだけで組む。しかも、ノーマルレアの封入率は5箱に1枚と親父に聞いた覚えがある。

前世とは大違いだ。そのため、ぼくのデッキのほとんどが通常モンスターで占められている。唯一のノーマルレアは黒曜岩竜、岩石族はこの1枚だけだから後は悪魔族通常モンスターとそのサポートカードで構成されている。こんな構成でもぼくはアカデミアでは上位の実力者として認知されている。

ただ、それでもトップではない。友人になった明日香や雪乃にはパワーで押し負けてしまい、三番手に甘んじている。けれど送られてきたカードを使えば前世で愛用していたデッキを組めるためパワー不足を解消できる。そうなれば明日香と雪乃にも勝てるようになる

と思う……回ればきつと。

そんなわけでぼくはデッキを強化した。その結果、純悪魔族デッキとなってしまうたのは仕方ない。このデッキを使って進学するぞ、と自分の寮部屋で高らかに意気込むのだった。

☆↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓★

そうして強化というよりも新たに組んだデッキで迎えた中等部最後……ぼくは快進撃を続けた。明日香と雪乃には勝ったり負けたりと安定しなかったが、他の生徒には無敗を貫いた。

女王と女帝とほぼ互角のデュエルをするので何かぼくの二つ名を考えているらしい噂を聞いたけど、あんまり恥ずかしくない名前にして欲しいと思った。そんなこんなで7月の卒業デュエルの日がやってきた。

ぼくの相手はツァン・ディレ、六武衆を使うデュエリストだ。この子とは2年最後の試験以来デュエルをしていなかったと思う。

「ツァンとは久しぶりだね」

「うん、そうだね」

ステージ上でほんとツァンは短く言葉を掛け合う。けど、お喋りすることは今のところはない。隣のステージでは雪乃と明日香も準備をしていて、卒業デュエルが始まろうとしていた。

くごほん。これより卒業デュエルを執り行います。準備はよろしいですね？>

『はい!』

体育館に備え付けられている大きなパネルに穏やかそうな男性が映し出される。アカデミア高等部の鮫島校長だ。校長の確認にぼく達はしっかりと返事をする。それに校長は満足そうに頷くと……。

<では、各々全力を尽くしなさい>

「それでは各人デュエルを初めてください」

『デュエルっ!』

明日香と雪乃、ぼくとツァンは相対してデュエルを始める。先行は……。

「先行は行かせてもらおうよ。ボクのターン、ドロー！」

先行はツァンからだ。さて、どう来るか……。六武のフィールドの制圧力と展開力は凄まじいものがあるから油断はならない。

「手札から六武衆の結束を発動！ このカードは六武衆と名のついたモンスターが召喚、特殊召喚される度に、このカードに武士道カウンターを1個乗せる、最大2個までだけだね。ボクは六武衆の御霊代を召喚。さらにボクのフィールドに六武衆と名のつくモンスターが存在するため、手札から六武衆の師範を特殊召喚！」

いきなり星5の上級モンスターか。確かツァンのデッキには真六武衆がいないし、門がないからまだ六武衆としては控え目な方だろう。

「さらに六武衆の結束に武士道カウンターが2つ乗る。ここで六武

衆の結束の効果発動。このカードを墓地に送る事で、このカードに乗っている武士道カウンターの数だけ自分のデッキからカードをドロースする……乗っているカウンターは2つ、だからボクは2枚ドロース！」

消費は3枚だけど実質1枚の消費と変わらない。六武衆の展開力を考えると六武衆の結束って強欲な壺と大差ない気がする。

「ボクは六武衆の御霊代の効果発動。このカードは自分フィールド上の六武衆と名のついたモンスターに装備する事ができる。ボクは六武衆の師範に装備して、攻撃力と守備力を500上げる。さらにボクは2枚伏せてターンを終了するよ」

いきなり攻撃力2600か……前のデッキだったら手も足もでなかったぞ。さてと。

「ぼくのターン、ドロース。ぼくは……」

「その前にボクのカードを発動させてもらうよ。リバーズカードオープン、神速の具足を発動。このカードはボクのドローフエイズにドロースしたカードが六武衆と名のついたモンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で特殊召喚する事ができる！」

厄介な……でも、この手札なら早々に破壊できるかな。まずはっと。

「残念だけど破壊させてもらうね。ぼくは暗黒界の取引を発動。互いに1枚ドロ―した後1枚捨てる……ぼくは暗黒界の龍神 グラファを捨てる。グラファの効果、このカードがカードの効果で捨てられた時、相手フィールド上にあるカード1枚を破壊する。ぼくは神速の具足を破壊！」

「させないよ。ボクはその破壊効果に六尺ノ勾玉を発動。自分フィールド上に六武衆と名のついたモンスターが存在する場合のみ発動する事ができる。相手が発動した、カードを破壊するモンスターの効果、マジック、トラップカードの発動を無効にして破壊する！」

くっ、防がれたか……今のぼくの手札は5枚。その中に破壊できるカードは来ていない、というよりも使ったばっか。今は捨て置くしかないか。

「破壊できなかったのは残念だけど。ぼくは暗黒界の狩人 ブラウを召喚して、墓地のグラファの効果を発動。自分フィールド上に存在する暗黒界の龍神 グラファ以外の暗黒界と名のついたモンスターを手札に戻す事で墓地から特殊召喚する……蘇れ、暗黒界の龍神

グラフィア！」

「攻撃力2700をあっさりっ!？」

「ぼくはツァンの六武衆の師範に攻撃！ 闇撃龍神破！」

「くっ、六武衆の御霊代の効果！ このカードを装備しているモンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する！」

グラフィアの闇色のブレスと師範の前に御霊代が現れて代わりに攻撃を受けたが、全威力を防ぎきれずその余波がツァンを襲う。もう慣れたけど、やっぱり立体映像なのに衝撃も再現されるなんてどうなってるんだろうか。

「ぼくは2枚伏せてターンエンド」

「ボクのターン、ドロー！ ボクは神速の具足の効果発動！ ボクが引いたのは六武衆の露払い。六武衆と名のつくモンスターだから特殊召喚！」

ここで露払いは痛いな……グラフィアが排除されてダイレクトアタックが来るだろう。紫炎が手札にあったらヤバイ。

「さらにボクは手札から六武衆の侍従を召喚！　そして、六武衆の露払いの効果を発動！　自分フィールド上にこのカード以外の六武衆と名のついたモンスターが存在する場合に発動する事ができる…自分フィールド上に存在する六武衆と名のついたモンスター1体を生贄にする事でフィールド上に存在するモンスター1体を破壊する！　ボクは六武衆の侍従を生贄に暗黒界の龍神　グラフアを破壊する！」

侍従が消えると露払いが持っていた短刀をジャンプしながら投げつけ、その短刀がグラフアの脳天に突き立ち破壊される。これでボクのフィールドは2枚の伏せカードを残しながら空きた。

「バトル！　ボクは六武衆の露払いと師範でダイレクトアタック！」

「ぐあっ!？」

まず露払いが音のない動きでぼくに一気に近付き短刀を一閃…かなり衝撃がきつい。けど、刀を上段にして突っ込んでくる師範の攻撃は防ぐ！

「ぼくは罰則金を発動！　自分の手札を2枚捨てる！　ぼくは暗黒

界の尖兵 ベージ2枚を捨てる！」

本当はブラウを捨てたかったけど念には念を入れる。

「この瞬間、ベージの効果発動！ このカードがカードの効果で手札から墓地に捨てられた場合、このカードを墓地から特殊召喚する。ぼくはベージ2体を守備表示で特殊召喚！」

「師範でベージを破壊。その後、ボクは2枚伏せてターンを終了する」

「ぼくのターン、ドロロー！」

ツァンのフィールドには2枚の伏せカードが追加されてる。ぼくが今引いたのは天使の施し……ここは安全策かな。

「ぼくは再度墓地のグラファの効果を発動！ ベージを手札に戻し、グラファを特殊召喚！ さらに天使の施しを発動し、3枚ドロロー！」

来たのはスノウとグラファ、ブラウ……捨てるのは。

「ぼくは暗黒界の狩人 ブラウ2枚を捨てる。このカードがカードの効果で手札から墓地に捨てられた場合、自分のデッキからカードを1枚ドロ―する。捨てたブラウは2枚、よって2枚ドロ―！」

「相変わらずズルい効果ね」

まあ、ノーコストだしね。言いたくなる気持ちはわかる。だけど、六武衆の展開力も似たり寄ったりだよ。ブラウで引いたカードはスノウと手札抹殺、よし。

「さらに手札抹殺を発動！ ぼくが捨てたのは暗黒界の術師 スノウが2枚、暗黒界の龍神 グラファが1枚。そして、暗黒界の尖兵 ベージが1枚の計4枚。まず先に手札抹殺の効果で4枚ドロ―！」

引いたのは魔轟神レイヴンと武神ゴールド、軍神シルバ、闇の取引か。レイヴンがいなかったら凄まじく重かったな。

「まずは龍神グラファの効果！ ぼくから見ても一番右のカードを破壊！」

「くっ、六武ノ書が……!?!」

よりもよって六武ノ書か……あの時ページ2体にしてなかったら露払いと紫炎の攻撃を受けて4100のダメージで負けていた。使わずに伏せた理由は壁が減るからだろうね。

「次にページの効果、墓地から特殊召喚! そして、残り2枚の暗黒界の術師 スノウの効果。このカードがカードの効果で手札から墓地に捨てられた場合、自分のデッキから暗黒界と名のついたカード1枚を手札に加える。ぼくは暗黒界の策士 グリンと暗黒界の刺客 カーキを手札に加える!」

ふう、手札はこれで6枚か。3枚だったのが一気に3枚増えた。前世だと禁止だった天使の施しだけど、この世界だと制限ではあるが使える。暗黒界を使うぼくからしたらとても助かる事だ。

まあ、禁止じゃなく制限の理由が気になってネットの掲示板で調べてみると、天使の施しのドロー以外の効果……手札を捨てる効果がいらぬ、という意見が多数だった。この世界だとデイスアドバンテージに見られている事に驚いた記憶がある。そんなぼく個人の回想はさておき、このターンで決める。

「ぼくは墓地のグラフィアの効果でページを手札に戻し、墓地から特殊召喚。そして、手札から魔轟神レイヴンを攻撃表示で召喚する」

黒尽くめの装束と眼の部分が赤く縁取られたマスクを被る黒い翼を持った男性が現れる。不吉を意味するオオガラスの名を持つ悪魔だ。

「魔轟神レイヴンの効果を発動。1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。自分の手札を任意の枚数捨て、その枚数分このカードのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。さらにこのカードの攻撃力はエンドフェイズまで、この効果によって捨てた手札1枚につき400ポイントアップする。ぼくは手札を6枚全て捨てる！」

「なんですってっ!？」

「6枚捨てた事でレベルが8になり攻撃力が2400ポイントアップ。元々の攻撃力は1300、よって3700! さらに捨てたのは暗黒界の尖兵 ページ、武神 ゴルド、軍神 シルバ、刺客 カーク、策士 グリン、闇の取引。その内5体のモンスター効果発動!」

レイヴンの攻撃力が3000を超えた事でこのデュエルを見ている

生徒達からざわめきが起こる。レイヴンを使うのはこれが初めてだから驚くのも無理ないよな。

「効果は逆順で処理する。まずは暗黒界の策士 グリン。このカードはカードの効果で手札から墓地に捨てられた場合、フィールド上に存在するマジック、トラップを1枚選択し破壊する！ ぼくが選ぶのはツァンの伏せカード！」

「なっ！？ くっ、トラップ発動！ 六武衆推参！ 自分の墓地に存在する六武衆と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。 ボクは六武衆の侍従を守備表示で特殊召喚！」

推参か……侍従を蘇生されたけど問題ない。ミラフォを警戒しての行動だったけど、杞憂に終わって逆に良かった。

「まだまだ行くよ。暗黒界の刺客 カーキの効果。このカードがカードの効果で手札から墓地に送られた場合、フィールド上に存在するモンスター1体を選択して破壊する。ぼくは今さっき特殊召喚された六武衆の侍従を破壊！」

「そんなっ！？」

「次に暗黒界の武神 ゴルドと暗黒界の軍神 シルバの効果。このカードがカードの効果で手札から墓地に捨てられた場合、墓地から

特殊召喚する！ 最後に、と言いたいけどぼくのフィールドには5体のモンスターが揃っているため、暗黒界の尖兵 ベージの効果は不発になる」

「う、うそ……」

うん、ぼくのフィールドには攻撃力2700のグラフィアが2体、攻撃力2300のゴールドとシルバ……そして、攻撃力3700のレイヴンが存在している。いや、壮観だね。まあ、相手からしたらたまったもんじゃないけど。

「バトル！ シルバとゴールドで師範と露払いを攻撃！ 銀破暗剣殺、金剛爆斧！」

「きゃああああ！？」

シルバは銀の剣、ゴールドは金の斧でそれぞれ攻撃し、師範と露払いを破壊した。これでツァンのフィールドは神速の具足だけ……これで決める。

「グラフィア2体と魔轟神レイヴンの攻撃……闇撃龍神双破！ クロウ・スラッシャー！」

「い、いやあああああつ!？」

2体のグラフィアのブレスとレイヴンの光の刃がツァンに殺到する：
…やり過ぎたかな？ 悲鳴が…：そりゃ怖いよね、うん。リアル過ぎるのも考え物だよ、社長。

「これで最後よ！ サイバー・ブレイダーでイビリチュア・マインドオーガスを攻撃、グリッサード・スラッシュ！」

「あああああつ!？」

ぼくとツァンのデュエルが終わった直後、隣の明日香と雪乃のデュエルも終わったみたいだ。勝敗はどうやら明日香が勝ったみたいだね。

「……ふう、まったく。ボクが負けるなんてね」

スカートをパンパンと払いながらツァンが話しかけてきた。悔しそうにしているが、どこかすっきりしている。

「負けっぱなしは嫌だからね。あの時のお返しと思ってよ」

「それにしてはオーバークイルは酷いんじゃないかな？」

酷いとはどの口が言うんだろうね。前のデュエルの時に紫炎とザンジにイロウ、師範と露払いの5体でトドメを差しにきたのはどこの誰よ。しかも、あの時はぼくのフィールド空だったんだけど。3体のモンスターのダイレクトアタックはまだマシでしょうが。そうぼくが言うと思い出したのかツァンは曖昧に笑って誤魔化す。おい、コラ。

「ま、いいじゃない。けど、ボクに勝ったんだから負けないですよ？」

「当然。負ける気はさらさらないよ」

最初から負ける気でデュエルするなんて相手に失礼でしょうが。常に本気で相対してこそ、デュエルは面白くなるんだから。ツァンは満足げにぼくの肩を叩いて観客席に向かう。どうやらお気に召したようだ。

明日香達の方も何かを話した後、雪乃が観客席に向かっていくところだった。そして、ぼくと明日香はそれぞれに対峙する。ああ、そうだ。ぼくが俺をやめた理由について説明しようかな。

やめた理由は至極単純な事。ただ単に今のぼくに俺という自称は合わない判断したから。その判断をする理由は……。

「これよりアカデミア中等部最優秀女子を決めるラストデュエルを開始する。両者、準備はよろしいですね？」

『はいっ！』

そう、ぼくは女子に転生したからだ。幼稚園の頃は母さんも大目に見てくれていたが、小学校に上がる頃に改めるよう軽く注意された。俺と自称する女の子はぼくとしても違和感があったのでそれは良かったんだが、私と言うのも何か違う。

だから中間を取ってぼくにしたというわけだ。単純にぼくっ娘が好きだっただけなんだけど。使い始めてから案外しっくりしたのは好きだからなのかと考えたりしたね。

ああ、あとぼくは名前が変わった。ぼくの名前は……。

「ハルカ。勝たせてもらおうわよ」

「勝つのはぼくだよ、明日香」

ハルカ……高千穂 ハルカ。漢字でもひらがなでもなく、カタカナでハルカ。自己紹介も完了したところで、明日香とのデュエルに集中しよう。戦績はややぼくが負けているから油断禁物。さあ、やろうか、明日香。

「高千穂 ハルカ、天上院 明日香……卒業デュエル、始めっ！」

『デュエルっ！』

いいデュエルをしようね、明日香。

01-TURN【俺がぼくになった理由（わけ）】（後書き）

【転生に関する設定】

外部からの干渉が無ければ『男↓女↓男↓女……』と転生する存在の性別は交互になる。

ただし、例外的に『両性↓ランダム』というパターンもあったり。

【オリ主】

このSSのオリ主は。性別が男↓女になり、名前も変わった。

名前…高千穂 ハルカ

苗字の読みは『たかちほ』

容姿の説明は『03-TURN』の後書きに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1013z/>

遊戯王GX～お気楽極楽食欲な学園生活～

2011年12月3日22時49分発行